

日本離床研究会ファシリテーター E-MATグループ

熊谷総合病院におけるE-MATの活動とその現状

高橋 雄己* 高野 利彦* 横山 浩康*

*熊谷総合病院 リハビリテーション科

熊谷総合病院は埼玉県熊谷市にある2次救急総合病院で、急性期から回復期まで幅広い患者層に対応している。今回当院離床チーム(E-MAT)の活動について報告する。

【E-MATの成り立ち】

当院では平成25年8月から離床チームを始動した。きっかけは看護部長とリハビリテーション科科長の立ち話から、看護師の退院支援への職能の向上と病院の活性化について看護部長より提案があり、多職種で離床を中心にチームを結成することが決定した。

【E-MATの活動】

当院での活動は主にカンファレンスとラウンドである。全病棟看護科長とリハビリテーション科担当療法士、NST担当管理栄養士、薬剤師等が集まり、週1回のペースで開催している。

カンファレンスでは離床困難例の、離床の計画について話し合い、必要に応じて退院支援室なども加わり、離床以外の課題にもシームレスに対応できるようにしている。



病棟ラウンドではカンファレンス参加者に病室担当の看護師が加わり対象患者のところへ出向き、ポジショニングや介助方法の確認、1日の離床スケジュールなどの確認を行い、離床チームと現場との情報共有を行っている。



【E-MAT導入におけるチーム連携の変化】

大きな変化としては「スタッフのADL向上への意識改革」である。以前より寝たきりに疑問を感じ、「この患者は起こしていけないだろうか」と考える機会が増えていると感じている。さらに、スタッフが患者の自主トレーニングの促しや補助に参加する様子が多くみられるようになり、療法士も自主練習をはじめとした治療時間以外のマネジメントを行うなど変化がみられた。

また、離床チームで病棟全体を包括的にアセスメントすることで、リハビリテーションの対象者を発見しやすくなり、リハビリテーションの依頼患者数が増加した。

【導入のコツ】

当院の離床チームは、トップダウン方式で軸となる各部門の代表者同士で話し合い、業務を下ろしていく形を取ったため、スタートダッシュがうまくいったと考えられる。導入を考える上ではまず、トップダウンを行える立場の人間の協力が不可欠である。今後の課題は、煩雑な業務の中で新しい活動を継続させていくことは難しく、いかに業務の中に組み込んでいくかが大切であると考えます。